

「サイレントウェイ導入表」の使用についてのコメント

①早稲田大学日本語教育研究センター 初級 総合1D担当 森沢小百合

- 使用したクラス：総合1D（学生13名）
- クラスの構成：中国、韓国、台湾、ベトナム、タイ、インド
- 使用日時：10月10日（土曜日）2限目の終わり
- 使用教材：カタカナ導入表
- 使用方法および使用後の感想

サイレントウェイでのかな導入は初めてでしたので、講習会で川口先生からご教授いただいたポイントに注意しながら、見よう見まねでおこないましたが、少々ぎこちなくなってしまうかと思うのですが、学生は大きな声を出して楽しんで活動に参加していました。

以下、活動内容についてお話しさせていただきます。まず始めに、カタカナ導入表を黒板に貼ったところ、学生からまず「見えない！」という声が上がってしまいました。先生からいただいたデータをA3拡大にはしたものの、講習会で先生がおっしゃっていたように、教室での使用には拡大造影機のようなものを使用する必要があると思いました。今回、教室にその機械があるかどうかを確認しなかった私のミスもあり反省です。仕方がないので、学生の方に近づき表を顔の高さに掲げ、後ろから文字を指していく方法をとりました。

アイウエオも通常のアから順番に発音させていくのではなく、発音しにくいウを最後に発音させることや色のついたことばに注意して発音させていくなどの活動で、本当に正しい発音がなされているのかどうかをチェックすることができ、発音指導にとっても役立ちました。1Dクラスに関しては、ひらがな／カタカナは一応及第点を取った学生が集まっているので、カタカナを指して読めないということはなかったのですが、発音を確認するという点でも教師学生双方に効果があるものと思われまます。その他、1人インドの学生がいて、彼は「ラリルレロ」の発音が巻舌になってしまうので、彼のみラリルレロを何度か確認しました。韓国の学生は、思ったよりも「チ」「ツ」の発音に手間取る学生もいなかったもので、比較的スムーズに進みました。

1文字ずつ発音をさせた後、単語での発音練習をしたのですが、これが結構盛り上がりました。学生の国（インド、タイ、ソウルなど）からはじまって、学生がよく目にするであろうものの名前（カメラ、コーラ、ケーキなど）を入れていき、その後指す文字数をどんどん増やしていったのですが、「シンガポール」と指している途中で、勝手に「新幹線！」と答える学生もいて大笑いでした。その他、「アイスクリーム」の「アイスク」まで私が指して続きを学生に指させる活動を行いました。

2時限目の授業の最後に活動を持ってきてしまったため、時間が足りなくなり、学生も少々物足りない感じでしたが、楽しくカタカナ導入ができましたことご報告いたします。

②横浜国立大学留学生センター 初級GA 担当 春名万紀子

横浜国大でのサイレントウェイ式仮名導入のその後のご報告が遅くなってしまいました。

前にお話したように、ひらがなの導入には十分な時間が割けなかったのですが、カタカナの導入は、もっと条件が悪く、超特急で終わって、「じゃ、休み中（学園祭などで1週間休みがありました）に全部、覚えておいてください。」なんてことになってしまいました。

カタカナも「あ行」の小文字や「ヴ」などが表に入っているので、特殊音は、従来の表を使うより、ずっと説明・練習しやすかったです。

平仮名の表はしばらく教室に貼ってあったので、長母音が入った言葉がでてくる度に表を使って、音の確認と文字の確認ができました。また、助詞が出てくるようになってからは、「は」、「へ」、「を」の音と文字の確認が「説明を聞く」のではなく、「自分の目で見て」できるので、それがとても良かったです。学生のこれらの助詞の読み違いや書き誤りは、以前より少ないように思うのですが・・・。ただ、このクラスは、先週になって、初めて会った学生が3人いたりで、6週目にして、やっとメンバーが確定したようです。ですから、クラスの何人が仮名の導入の時にいたのかなというところです。

また機会があれば、あの表を使って、仮名導入をやってみたいというのが感想です。もっとも、それまでに腕を磨く必要はありますが。

③ シンシンアカデミー 初級 プライベートクラス 担当 宋美娟（ソン・ミヨン）

・使用したクラス：初級のプライベートクラス

・クラスの構成：来日4ヶ月の11歳の韓国人の子ども

読み・聞きにはなれているが、書き・話しにはまだ間違いがよくある。

特に、特殊音は聞き取りも発音もはっきりできず、

「ひょう」「きゃ」「にゅう」などイ行と拗音の組み合わせに迷っている。

・使用日時：1回目：12月4日（金曜日）約10分

2回目：12月8日（火曜日）約5分

・使用教材：ひらがな導入表

・使用方法および使用後の感想

今年の3月から子どもを教えていて、文字の学習に苦勞していることをよく見てきました。子どもは成人学習者にひきかえ、聞いて覚えるのは早いですが、文字を覚えて書けるまでは成人よりもっと時間がかかります。そのため、文字を覚える段階で日本語に興味を失うこともあります。

しかし、日本で生活していく上で、文字が読めないというのは生活が不便だという簡単な問題ではなく、日本に来て2年にたっても漢字はおろか、カタカナも覚えられず、生活に困っているのはもちろん、学校の友達からいじめの対象になったりすることもありました。

このような子ども学習者のカナ導入において、何かいい方法はないのかと悩んでいたところ、川口先生からいただいた「サイレントウェイ導入表」は大変ありがたいものでした。

今回私が使用したクラスは、日本語を習い始めてから、約4ヶ月（週2時間）立っている小学校4年生の子どもです。

この子は読むことにおいては問題がありませんが、書こうとしたら色々なところで間違いが起こり、同じ間違いが何度も重なっていました。特に、母語の影響なのか、特殊拍の発音の特徴にはまだ気づいてないようでした。

メタ言語を使わず、子どもに特殊拍の発音上の特徴に気づかせるに苦勞していたところ、「色」を手段にして気づかせるのはとても効果的でした。

1回目ではひらがなだけで10分ぐらい、彼女の苦手な発音を矯正するつもりでやってみました。私自身が母語話者ではないため、私の発音に影響される余地があると判断し、ことばを直接言わず、質問をしてその答えを自分で発音しながら仮名表から指すように進めました。

たとえば、「しんぶん（新聞）」の場合、教師から「お父さんは毎朝何を 읽습니다か？」と質問をすると、学生は「しんぶん」と言いながら仮名を指す形でした。

仮名表を使う授業の前は「しんぶん」と2拍に認識したものの、仮名表を使って発音した後は、『「しんぶん」って「し・ん・ぶ・ん」ですか？韓国は「シンムン」2つなのに、日本は「しんぶん」4つですね』と気づいてもらい、とてもうれしかったです。

途中で『「せんせい」の「い」は「緑のい」』など、仮名に色をつけて言っていました。また、1回目の使用ではなんとなく黒ではない方を指していたのが、2回目の使用の後、『「い・う・は」って二つあるんですよ』と言い、発音が2パターン存在するのも色ではっきり分けて認識したようでした。

子どもは色に敏感であるため、色で分けられている仮名表には大変興味を持っているようでした。

また、プライベート授業でしたが、表をホワイトボードに貼っておいて、前に出て仮名を指すように指示したら、子供は先生の立場に立つことがとても楽しいようで、ホワイトボードの前で、まるで自分が先生になったかのように楽しく仕切っていました。

川口先生のおかげで私も子供の楽しい授業ができ、とても感謝しています。

一つ提案したいことは、この子の場合は、「びょう」「きゃ」「しゅう」など、イ行と拗音が接続するのがすぐ理解できない問題があり、「へょう」「くゃ」「すゅ」と書いたりすることがありました。今回の仮名表を使った授業でも最初はやはりその誤用が起こり、最初はイ行ではないところで迷っていました。

そこで、イ行と拗音を基本色（黒）ではなく、違う色（グレーぐらい？）にし、イ行と拗音のつながりを見せてあげたらどうかと考えてみました。

しかし、そうなると「基本音」対「イ行&拗音」の色が違ってしまうことになるので、それは大丈夫なのかという疑問が残ります。これによって、またわかりにくくなることはないかをもっと考えてみたいところです。